看板、パネル新設で教訓後世に

女川いのちの広場　七十七銀支店遺族が設置

震災と津波襲来克明に

新設パネルを眺めながら命の尊さと教訓を伝える大切さを語る田村さん

女川町黄金にある東日本大震災伝承モニュメント「女川いのちの広場」で、新たに広場の名称を示す「震災伝承施設案内標識」（看板）と、女川での震災の記録と教訓を伝えるパネルが設置された。

広場は、13年前の津波で命を落とした七十七銀行女川支店の行員の遺族らが町有地を買い取って令和4年に整備した慰霊と伝承の場。男女の行員がほほ笑む姿が印象的な石碑がシンボルで、その台座には高台へ逃げることの大切さを訴えた文章も刻まれ、「悲惨な事故が2度と繰り返されないように」との願いが込められている。

新設の看板とパネルは、行員遺族で長男の健太さん（当時25）＝を亡くした田村孝行さん（63）弘美さん（61）夫妻が代表を務める一般社団法人「健太いのちの教室」が設置した。

パネルには発災当日の津波が襲来するまでの主な出来事が時系列で記され、震災前後の女川町のまちなみを写した写真や町の被害概要などもまとめられている。また女川支店で起きた悲劇を風化させないようにと、あの日の出来事も記載。当時を知る町民らが3・11について語ったインタビュー動画のリンクのQRコードも盛り込まれている。

パネルと看板は、永く保存されるよう塩害浸食を防ぐ素材を使用。設置費用は約100万円で、社会課題解決「みやぎチャレンジプロジェクト」（県共同募金会主催）にあった寄付金を一部活用。設置業務は㈱ビヨンド＝石巻市鹿妻南＝が担った。

「広場に訪れた方々に、単に女川で起きた出来事を伝えるだけでなく、災害時に命を守れる避難行動を選択できるよう心構えや備えについても考えられる場にしたい」と孝行さん。「過去の教訓を残すことが未来の命を守ることにつながる。女川支店のような悲劇を2度と繰り返してはならない。企業防災のあり方を考えてもらう契機になれば」と願った。

発災時、女川支店の従業員は上司の指示で2階建ての支店屋上（高さ約10㍍）に避難したが、津波で12人が死亡・行方不明となった。パネルでは「走って1分の場所に高台があり、防災無線も高台への避難を呼び掛けていたのに、なぜ支店にとどまる判断をしたのか」と企業防災のあり方と命の尊さが訴えられている。【山口紘史】